

幕末・明治初頭の新聞

— ジャーナリズムのあけぼの —

幕末から明治のはじめ、日本が西欧文明を摂取して近代化していった時代、近代的な新聞、雑誌も誕生した。そして、明治政府の言論弾圧に耐えながら成長し、現代ジャーナリズムの基礎を作上げた。

今回は特に幕末・明治初頭の新新聞について、焦点をあててみた。

1. 新聞誕生前夜

我々が今日手にしているような新聞は、明治の初年に起こったといわれている。その要因の一つは日本に古くからあったコミュニケーションの方法である。いわゆる「よみうり瓦版」(1)が代表的なものである。もう一つは外国新聞の影響である。新聞というものの効果について認識したのは、万延元年の新見豊前守等の遣米使節や元治元年の池田筑後守等の遣欧使節が新聞社や新聞社の運営を実際にみてきたことによる。事実、遣米使節の随員小栗上野介や遣欧使節であった池田筑後守からは新聞紙創刊の献策がなされている。

外国新聞そのものの影響となると、「オランダ風説書」あたりから考えられる。オランダ風説書は、幕府がオランダ商館に命じた義務の一つで、長崎来航のオランダ船によってもたらされた海外情報・世界のニュースを上申させ、長崎奉行が阿蘭陀通詞に翻訳・清書させて幕府へ特別至急便で送り届けさせたものをいう。勿論その情報源は各地各種の新聞であった。その後開国通商条約の締結から国論が沸騰して、開国攘夷、尊皇討幕の運動が、年と共に激しさを加えてきた。それとともに新聞に対する欲求も強くなってきた。このような情勢の中で、幕府として新聞公刊を決意させ、「官板バタビア新聞」が現れるに至った。

2. 翻訳・翻刻新聞

上述の「官板バタビア新聞」は、幕府の蕃書調所(文久2年5月以後は洋書調所)の学者が、バタビア(インドネシアの首都ジャカルタのオランダ領時代の名)のオランダ政庁が発行していた週刊新聞「ヤバッシュェ・クーラント」から必要と思われる記事を邦訳して、蕃書調所の活字方で印刷し、江戸書肆老皂館万屋兵四郎に発売させたものである。

蕃書調所の学者たちは上述のようにオランダ語新聞からの翻訳新聞の編集に携わる一方で、当時、中国の上海、香港、寧波で発行されていた新聞や雑誌を翻刻して、やはり、老皂館万屋兵四郎に販売させていた。「官板中外新報」(2)、「官板六合叢談」,「官板香港新聞」(3)などがあった。この元版の新聞は、当時中国にあったプロテスタントの宣教師たちが布教の目的で発行したものであった。このほかに「遐邇貫珍」(4)というのがある。文久から元治のころ漢文新聞の翻訳または筆写されたものであるといわれている。

3. 外国人経営新聞の発生

幕末になると、長崎や横浜で英字新聞が発行された。これらの英字新聞は、日本在留の英国人や米国人が在留民に欧州諸国並びに中国、日本の事情を報道し、各港における出入船舶その他貿易活動に必要な事情を知らせるために創刊されたものである。

日本で最初に発行された英字新聞は、長崎で発行された「ナガサキ・ SHIPPING・リスト・アンド・アドバータイザー」(The Nagasaki Shipping List and Advertiser)(文久元年6月22日創刊)である。幕府でも情報入手のため、洋書調所の人々に命じて、その後出された「ジャパン・ヘラルド」や「ジャパン・コンマーシャル・ニュース」を訳させた。「日本貿易

新聞」(5)、「横浜新聞」などの題号をもちいて回覧させている。「ジャパン・タイムス」(The Japan Times) (慶応元年7月創刊)も邦訳せられ「日本新聞」(6)として回覧された。「日本新聞」を邦訳した人たちが、ときどき「ジャパン・ヘラルド」の記事を邦訳して「日本新聞外篇」(7)として発行している。これらの新聞を邦訳した洋学調所の学者たちには、柳河春三、箕作貞一郎(麟祥)、渡部一郎(温)、内田弥太郎、鈴木唯一、河本清次郎等がいた。これらの人々は、この邦訳事業の進行中に、柳河春三の首唱で会訳社という団体を組織し、この仕事の継続につとめると同時に上述のようにして出来上がった新聞の有料回覧を行った。この会訳社が新聞文化の創出、輸入に大きな役割をはたした。

次に外国人もしくは外国籍の日本人によって、発行された幕末の邦字新聞について記す。

その第1にあげるべきは、ジョセフ・ヒコの「海外新聞」(8)である。横浜開港の時、領事館通訳として帰国し、横浜で日米外交交渉の通訳などにあたっていたが、一方において、外国ニュースを熱望している土民の多いのを察して新聞の発行を思い立った。それがこの「海外新聞」である。毎月2回横浜へイギリスの船が入港する毎に新聞紙を得て、これを邦訳し木版にて発行した。この新聞は、従来の官板新聞に比して、ニュースの現実性と定期性において遙かにすぐれ、真に「翻訳新聞」の名にふさわしいものであった。

第2にあげるべきは、イギリスの牧師バックウォース・エム・ベーリー(Buckworth M. Bailey)編集の「万国新聞紙」(9)である。内容は、海外ニュース、学術の紹介のほか国内ニュースも含んでいた。直接国内ニュースを取り入れ、報道したのは本紙が最初であった。「海外新聞」と「万国新聞紙」の発行は、国内における近代新聞発生に一步近づいたといえることができる。

4. 近代新聞紙の出現

(1) 明治元年の新聞

大政奉還、王政復古、そして維新の内乱が起こり、社会の混乱のなかで、ニュースの要求が異常に高まったと思われる。このようななかから日本に自生の新

聞が現れ始めた。江戸では、「中外新聞」(11)、「中外新聞外篇」(12)、「内外新報」(13)、「新聞事略」(14)、「公私雑報」(15)、「江湖新聞」(15)、「遠近新聞」(16)、「日々新聞」(17)、「そよふく風」(18)、「開成新聞此花新書」(19)等が発行された。この中で特に注目すべきものとしては、柳河春三の「中外新聞」と福地源一郎(桜痴)の「江湖新聞」がある。

前者は会訳社の筆写新聞の発展として外字新聞の翻訳印刷を通じて外国事情の紹介に重きを置きつつ国内事情の報道にも注意するという意味で中外と称したと述べている。維新最初の新聞として、しかも近代的新聞紙の初期的内容をもっている新聞として、すでに当時1,500部を売り、さらにその成功が多く新聞を誘発したという点で注目すべきものであった。福地の「江湖新聞」は期するところは「中外新聞」と同じであるが、その編集方針が、画入、総仮名付で、童蒙婦女にも読めるようにした点で、新聞の大衆化を志向していた。

江戸で発行された新聞発行者の多くは、かつての会訳社の同人であるか、洋書調所の教官であるか、あるいは幕府に仕えていた人々で、海外の事情にも通じていた。彼らは幕府改革の必要性を認めながら、維新の内戦は、薩長2藩の幕府打倒の私情によるものと位置づけ、むしろ、開国政策をとる幕府を庇おうとする論調であった。このような佐幕的新聞を明治政府が喜ぶ訳がなく、書籍出版物の許可制を厳達したため、全部影をひそめた。

この頃横浜では、先に述べた「万国新聞紙」が継続発行されていたが、あらたに、米人、ヴァンリードの主宰で、岸田吟香が「横浜新報もしほ草」(20)を発行した。その内容は佐幕的傾向もあったが、論説の中には、例えば第12篇の「新策」におけるように、内乱を早く鎮めて外国の乗ずる機会を早くなくし、土地人民を政府の手に収めて、国内統一の必要を力説するなど注目すべきものも多くあった。この新聞が明治政府の弾圧を脱し得たのは、外国人の主宰者、居留地発行のためであった。

大阪では「内外新聞」(21)がその最初である。明治政府の有力者大阪府知事後藤象次郎等が大阪、京都在住の3書肆に発行させたもので、明治政府よりのものであった。京都では「都鄙新聞」(22)が発行

された。これもいうまでもなく明治政府よりの新聞であった。これら京阪の2新聞は政府の取締にあつていないにもかかわらず明治元年9月をもって廃刊した。

(2) 近代新聞紙の出現

明治政府は内乱が鎮まるとともに、新聞の発行を進んで許可することとなり、明治2年2月、開成学校および府県裁判所を担当官庁として民間新聞の発行を認めることとなった。この規則がでると柳川春三が「中外新聞」を復活し、新しく発刊された新聞もあったが「中外新聞」以外はすべて短命に終わっている。

明治3年には「海外新聞」(23)と「横浜毎日新聞」が発刊された。「海外新聞」は、大学南校が出版したもので、普仏戦争の状況を報道することを目的としていた。「横浜毎日新聞」は明治3年12月1日横浜で発行された我が国最初の日刊紙である。この新聞は、私たちが現在新聞紙といえども目に浮かぶような、広い西洋紙何ページかに印刷されたものであった。

明治4年廃藩置県が実施され、明治政府はその基礎をようやく打ち立てたが、それを確実不動のものにするためには全国民の国民意識を一にする必要があった。時の要人木戸孝允は新聞の発行をもってこれにあたらうとし、同藩人山県篤蔵を主任として「新聞雑誌」(25)を発行させた。この新聞は明治8年1月に「あけぼの」、同年6月には「東京曙新聞」となった。

明治5年2月21日には、現在の「毎日新聞」の前身である「東京日日新聞」(26)が創刊された。かつて福地源一郎の「江湖新聞」の発行に携わったことのある条野伝平、西田伝助、浮世絵画家の落合芳幾(2ヶ月後に廣岡幸助が参加)の3人が創刊したもので、条野の自宅で発行したものである。

「報知新聞」の前身である「郵便報知新聞」(27)は郵便事業創設の大功労者前島密が着想して、秘書の小西義敬と東京日本橋で書物屋を営んでいた泉屋太田金右衛門に発行させたものである。この新聞の特徴は、駅通寮の命令で各地方からニュースを集められたことである。創刊以来明治10年代を通じて同新聞の地方記事が光っている。

要するに明治4、5年になって初めて近代新聞が出

現してきたと考えられる。

<新聞一覧>

1. 瓦版 [元治元年7月19日禁門の変焼失市街図] [070, 211]
2. 官板中外新報 第1巻1-12号(3, 9欠) 第2巻1号咸豊8-11刊(東都 老皂館) [071]
中華民国発行のものを日本で復刻発行したもの。
3. 官版香港新聞 1-2巻 文久2年刊(東都老皂館) [071]
原書香港の英字新聞「ディリー・プレス」の漢文版
4. 遐邇貫珍 支那時文新聞写本 存1853(8-12), 1854(1-12), 1855(1-3, 6, 7, 9-12), 1858(1-5) [071]
漢文新聞を筆写したもの
5. 日本貿易新聞第55-200号(76, 80欠) 元治元-2年 [071]
1863年3月創刊、1865年5月24日終刊?
その頃横浜では外国人が増して、The Japan Herald やThe Japan Commercial Newsなどの英字新聞が発行されていた。洋学調所で邦訳したものが「日本貿易新聞」と題された。
6. 日本新聞 第1-13号(2, 4, 6, 9, 11欠) 慶応元年刊 [071]
7. 日本新聞外篇 第1-5号(3欠) 慶応元年刊 [071]
8. 海外新聞 第1-12号(7-9欠) 横浜彦三 訳・述 元治2-慶応元年写 [071]
ジョセフ・ヒコが遠江国掛川の本間潜蔵の協力を得て、邦字新聞を発行したもの。岸田吟香も新聞発行に携わっている。「毎月2回横浜にイギリスの船が入港する毎に新聞紙を得て、これを邦訳し木版にて発行したものであるという。発行部数は百部位、直接申し込みは2名に過ぎず、経営難で、ヒコが長崎に赴くと共に廃刊したらしい。この新聞は、従来の官板新聞に比して、ニュースの現実性と定期性において遙かに優れ、真に「翻訳新聞」の名にふさわしいものであった。(西田「明治時代の新聞と雑誌」13P)
9. 万国新聞紙 2・3・6月 慶応3年1月中旬創刊 不定期(横浜英人 ベーリー編) [071]

10. 倫敦新聞紙 2集 英吉利西 斯加亞登 慶応3年10月 [071]
11. 中外新聞 第1-45号, (再刊) 第1-13号 慶応4年2月創刊 (柳河春三) 月10回 (東京 開物社) [071]
12. 中外新聞外篇 第1-23号 (9欠) 慶応4年5月-6月 (東京 開物社) [071]
13. 内外新報 第1-45号 (28, 41, 43欠) 慶応4年4月創刊 隨時 (東京 海軍会社) [071]
14. 新聞事略 第4号 慶応4年4月創刊 隨時 (東京 撤兵会) [071]
15. 江湖新聞 第7-22号 慶応4年閏4月創刊, (東京 福地源一郎) [071]
16. 遠近新聞 第6-13号 (10欠) 慶応4年4月創刊 隨時 (東京 和泉屋半兵衛) [071]
17. 日々新聞 第1-18輯 慶応4年閏4月創刊, 隨時 (東京 海軍博聞会社) [071]
- 「慶応4年閏4月18日創刊, 同4年6月5日第18号終刊。... 発行人は博聞会社執事とあるばかりであったが, 尾佐竹猛所蔵本に, 編輯元は徳川亀之輔家来海軍役安井勘次, 鈴藤祐次郎, 軍艦役並見習橋爪貫一とあったことから, 宮武外骨はこれらの人々を編集関係者とし, 橋爪を主導者としている。恐らく正しいであろう。本紙もまた維新動乱関係の記事が多く, 外国事情などの報道がほとんどないといってよいが, 第12輯の「サンフランシスコより或る書目の来状」など一部先覚青年には見逃せない記事であったであろう。注目すべきことは, 本紙も短命であったが, 第5号以下は完全に日刊であることである。」(洋学史事典)
18. そよふく風 第1-7号 慶応4年5月創刊 隨時 (東京 詳知会社) [071]
- 開成所の洋学者たちによる新聞。11号で廃刊。佐幕派新聞で, 官軍東征に伴う各地の戦報が中心。
19. 開成新聞此花新書 第1-5号 慶応4年4月創刊 隨時 (横浜) [071]
- 横浜で発行された佐幕派新聞。戊辰戦争の戦況や国内外の珍聞。
20. 横浜新報もしほ草 第1-35篇 慶応4年閏4月創刊 週刊 (横浜 ヴァン・リード) [071]
- 「慶応4年閏4月11日 (1868年5月3日) 創刊。明

治3年3月13日 (1870年4月15日) 発行の第42篇で終刊?。... 当時横浜に居留した米人ヴァン・リード (Eugene M. van Reed) が発行者で, 岸田吟香がこれを助け, 英文原稿を邦訳し, 国内記事の選択に参加して発行したのであろう。ヴァン・リードはジョセフ・ヒコ (浜田彦蔵) とは相識であり, 岸田は周知のようにヘボンの和英辞書の編纂を助け, またジョセフ・ヒコの「海外新聞」の発行に携わった経験者でもあったので, この新聞の発行も順調に行われたらしい。発行所が治外法権の横浜の居留地内であったため, 明治元年の新聞雑誌などの発行禁止令を受けておらず, 国内の邦字紙屏息の後も, 東京はじめ各地方に読者を得て好評であったと伝えられている。... 明治2年に入ると急速に発行回数が衰えて最終刊といわれる第42篇までわずか10号を出すに止まった。これは明治2年3月, 新聞紙印行條例を公布, 新聞雑誌の発行が復活したこと, 他の面では, 日本労働者を日本政府の差止めにもかかわらずハワイへ送ったことなどで不評を買ったなどのことが影響したのであろう。」(洋学史事典)

21. 内外新聞 第1-17号 (6欠) 慶応4年4月創刊 週刊 (大阪 知新館) [071]
- 大阪で発行された最初の新聞。時の大阪府知事後藤象二郎, 権判事陸奥陽之助 (宗光) 等が京阪の3書肆に発行させたもの。神戸で発行された英語紙「ヒョーゴ・ニュース」からの抄訳による, 大阪, 神戸, 京都などの近畿圏の記事が主である。慶応4年8月17日号で廃刊。
22. 都鄙新聞 第1-2号 慶応4年5月創刊 (京都 至誠館) [071]
- 京都で発行された官軍派新聞。京都の書肆村上勘兵衛が版元であったらしい。8号で廃刊。国内雑報が主であった。
23. 官版海外新聞 第1-50号 (10, 33, 36, 46欠) 大学南校編 明治3年7月創刊 (東京 紀伊国屋源兵衛) [071]
- 「大学南校 (後の東京大学及び東京帝国大学法・文学部はその後身である。) の発行である。この新聞は, 普仏戦争の状況を報道することを第一の目的としたもので, 箕作麟詳が指導したらしい。柳

河春三も相当深い関係を有したようである。」(西田「明治時代の新聞と雑誌」25 p)

24. 日要新聞 第1-3号 明治4年12月創刊 毎月6回 (東京 轉新堂) [071]

皇室, 内務省の記事が中心。

25. 新聞雑誌 第1-7, 81, 99号 長三州編 明治4年5月創刊 随時 (東京 日新堂) [071]

「明治4年5月1日(1871年6月18日)創刊, 明治7年12月第357号まで発行(翌8年1月8日から「あけぼの」と改題し続刊。8年6月2日から「東京曙新聞」と再改題。)... 木戸孝允が明治3年末から計画して同藩出身の杉山孝蔵, 山縣篤蔵, 長三州(英)らが参画, 実現したものである。それは一方において新政府の施政の方針を平明に広く伝え, 民衆を啓蒙すると共に漸次に国民的結合を育てていこうとする意図を持っていたものと考えてよいであろう。具体的には官制の変改, 教育の普及, 風俗の改良, 墮胎間引きなどの弊習の排除, 救貧活動, 産業特に農業改良指導, 地方民会の試みなどの報道などに努めているが, このころ頻発した農民騒動などは意識してかあまり報道されていない。... 明治4, 5年頃の有力新聞で政府買い上げ新聞の一種であった。」(洋学史事典)

26. 東京日日新聞 第1, 121-525号(欠多し) 明治5年2月21日創刊(東京 日報社) [071]

現「毎日新聞」(東京本社版)の前身。我が国における新聞らしい新聞の始めといってよい。福地源一郎が明治元年に発行した「江湖新聞」に協力した条野伝平(号は採菊, 山々亭有人), 西田伝助(董波), 錦絵画家落合芳幾が相談して, 当時の浅草茅町1丁目所在の条野の住居で創刊した新聞で, 発行所を日報社といった。初号発行間もなく, これも上記「江湖新聞」に関係があり, 西田と相識の間柄である地本屋廣岡幸助もこれに参加した。明治5年3月以後「新聞雑誌」, 「日新真事誌」とともに政府買い上げ新聞となった。明治7年10月末に福地源一郎が主筆として入社, 太政官御用(太政官公表記事を独占的に掲載する意)の文字を掲げると共に漸進主義を主張して, 当時の急進的民権論に対した。御用新聞といわれた理由である。

27. 郵便報知新聞 明治11年-13年(欠多し)(東

京 報知社)

[071]

「当時駅通頭であった前島密が下僚の小西義敬を退官せしめて発行させたものである。創刊時の関係者には, 右のほかに太田金右衛門, 岡敬孝らがあつた。... 明治7年, 栗本鋤雲が入社, 福沢諭吉も影で援助することになった。同年古澤滋が入社, 翌8年, 藤田茂吉, 箕浦勝人, 牛場卓蔵が入社。民権派新聞中, 最も有力な新聞となつていった。」(「國史文献解説 続」407 p)

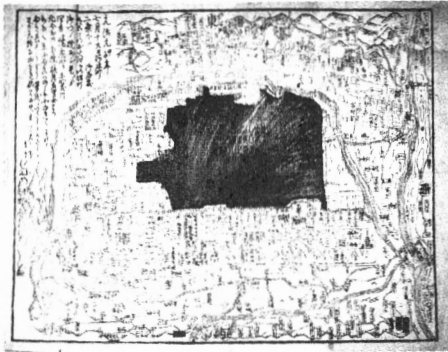
参考文献

1. 西田長寿「明治時代の新聞と雑誌」
至文堂 昭和36年刊
2. 日蘭学会編「洋学史事典」
雄松堂出版 昭和59年刊
3. 日本近代文学大辞典 第5巻-新聞・雑誌-
講談社 昭和52年刊
4. 岡野他家夫「日本出版文化史」
原書房 昭和34年刊
5. 遠藤元男・下村富士男編「國史文献解説 続」
朝倉書店 昭和40年刊
6. 明治文化全集 第4巻 新聞編
日本評論社 昭和30年改版
7. 幕末明治新聞全集 1-6, 別(8冊)
世界文庫 昭和48-49年刊
8. 太陽コレクション かわら版・新聞
平凡社 昭和53年刊
9. 「神原文庫分類目録」
風間書房 昭和39年刊

本稿は平成10年11月1日~8日に開催された神原文庫資料展「幕末・明治初頭の新聞・雑誌」の小冊子より新聞の部分を抜粋再編集したものです。

編集: 図書館専門員 松本 孝(故人)
情報サービス係長 龍満 馨

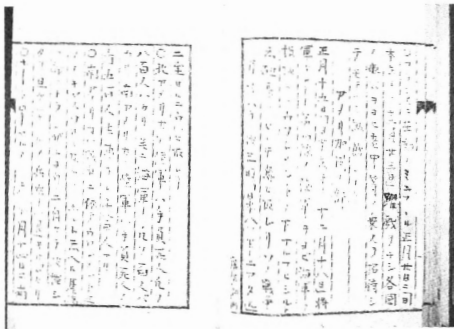
「幕末・明治初頭の新聞・雑誌」より抜粋



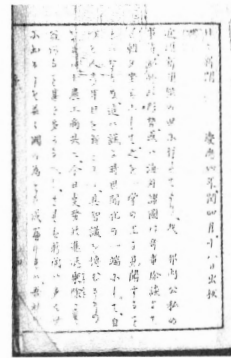
1. 瓦版 [元治元年7月19日禁門の変焼失市街図]



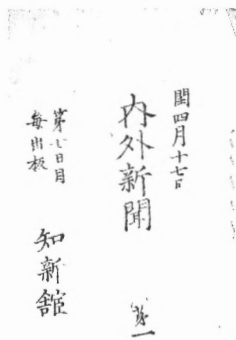
5. 日本貿易新聞



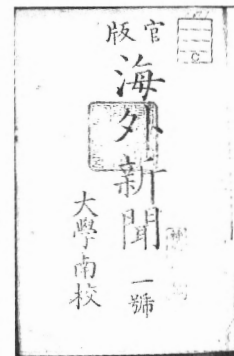
8. 海外新聞



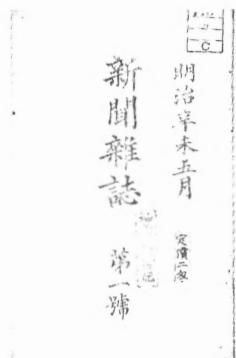
17. 日々新聞



21. 内外新聞



23. 官版海外新聞



25. 新聞雑誌



26. 東京日日新聞